

大隅基礎科学創成財団の支援者の皆様へ

昨年は、北川先生、坂口先生がノーベル賞を受賞され、沢山の関連する報道がなされて科学に対する関心が広がりました。お二人共、基礎研究の大切さ、長期的な視点から研究の支援の必要性について語られました。

財団設立のきっかけとなった私自身のノーベル賞受賞から今年で10年になります。大隅基礎科学創成財団もこの夏で、10周年に入ります。この間様々な困難な課題もありましたが、関係者の努力と、沢山の方々の温かいご支援のおかげで、活動の枠も広がり、確実に前進を続けることができました。

その中で浮かんできた課題の1つは、財団の活動をいかにして今の若い世代に伝えられるかという問題でした。これは日本社会が抱える世代間のコミュニケーション・ギャップの問題でもあります。この問題に真剣に取り組み始めた矢先、年末に思いがけないムーブメントがありました。その中で、これまでの活動を遥かに超える多数の人達からの科学に対する期待、当財団への支援のコメントを頂く機会となりました。この件に関しましてはその経緯や財団の考えを別に述べさせていただきます。この思いがけないうねりを受け止めて、今年から新たに SNS, YouTube などを活用した発信にも取り組もうと考えています。

さらに財団は、8月からスタートする第10期に向けて、次の10年を見据えた新しい活動方針をしっかりと議論し、財団の2つの柱を堅持して、基礎科学の振興のための努力を続けたいと思います。皆さんの一層のご支援をお願いする次第です。

公益財団法人 大隅基礎科学創成財団
理事長 大隅 良典

CONTENTS

- p.2-p.8 : **特別対談** ノーベル賞受賞者が語る「基礎科学」と「日本の未来」
坂口志文氏（大阪大学特別荣誉教授）×大隅良典理事長
- p.9-p.11 : **支援の輪** 寄付の広がりに関するご報告
- p.12 : 第8期（2024年8月～2025年7月）活動報告
- p.13-p.14 : 研究助成
(1) 第9期研究助成贈呈式
(2) 第9期研究助成採択者及び研究課題
- p.15 : 創発セミナー『遺伝子の発現とその調節を観て理解する』
東京科学大学 総合研究院 教授 木村宏氏
- p.16 : 市民講座 第9期（2025年度）第1回サイエンスカフェ報告
- 「サイエンスカフェ in 仙台」 -
- p.17 : 微生物機能探究コンソーシアム活動報告
- p.18 : 基礎科学の話「基礎科学が紡ぐ未来の価値—誰も予想しないイノベーションに結びつくから面白い」 竹重一彦理事
- p.19 : 2026年財団イベント予定「第11回 小中高生と最先端研究者とのふれ合いの集い in 愛知」
- p.20 : 財団事務局からご寄付のお願い



2016年12月7日ノーベル賞受賞者記念講演
カロリンスカ研究所（ストックホルム）にて

特別
対談
P2～

ノーベル賞受賞者が語る「基礎科学」と「日本の未来」

支援
の輪
P9～

基礎科学の未来へ、寄付の輪が広がる

特別対談

ノーベル賞受賞者が語る

「基礎科学」と 「日本の未来」

免疫学と細胞生物学—

異なる分野で世界的な発見を成し遂げ、
ノーベル生理学・医学賞に輝いた二人

の研究者が語り合う。科学の未来、研究者のあり方、そして若者たちへのメッセージとは。
(敬称略、司会是小林武彦 東京大学定量生命科学研究所教授、大隅基礎科学創成財団理事)

大阪大学特別栄誉教授

坂口志文氏

東京科学大学名誉教授
本財団理事長

大隅良典



「ノーベル賞受賞は名誉でもあり、幸運でもありました」(坂口)

「多くの人からの温かいメッセージが財団設立の一つの動機に」(大隅)

小林: 坂口先生、今回のノーベル賞受賞、誠に
おめでとうございます。心よりお祝い申し上げ
ます。まず、受賞のご感想からお話をいた
だければと思います。

坂口: 本当に名誉なことだと思っています。
同時に、私たちは非常に幸運だったとも感じ
ています。医学・生理学の分野で毎年一つだ
けテーマが受賞しますが、そのノーベル賞を
待っていらっしゃる方が何百人もおられるの
かもしれません。そういう意味では、宝くじ
に当たったような面が少しありますね。

小林: 大隅先生も 2016 年に受賞されたとき、
すぐくお忙しそうにされていたのを間近で見
ていたのを思い出しました。

大隅: 確かに、生活が一変してしまったよう
な感じでした。そういう意味では、楽しい経
験というより、なんとかこなしたということ
の方が多かったように思います。

ノーベル賞をもらうことはあまり意識したこ
とがありませんでしたが、実際にそうなると
「こんなにいろいろやることがあるんだな」
と。ただ、たくさんの知らない方から温かい
メッセージをいただけたのは本当にありがた
く、楽しかった。それが財団(大隅基礎科学創
成財団)を立ち上げ、「少しでも何かできるこ
とがあれば」という気持ちにつながりました。

小林: 坂口先生はこの大隅基礎科学創成財団
をご存じでした？

坂口：ええ。ノーベル賞の賞金をもとに財団を作られ、基礎科学へのサポートを始められたというニュースは知っておりました。

小林：坂口先生は大阪大学にポジションをお持ちですが、休日などは何をされていたのでしょうか。やはり研究でしょうか。

坂口：若い時は土日もいろいろやっていましたが、最近は、好きな本を読んだりします。ただ、学生のために論文も仕上げていかなければなりませんから、土日の半分はそちらに使い、残り半分は本を読んだり散歩したり、リラックスして過ごすというのがここ 10 年ぐらいですかね。

小林：悠々自適というか。

坂口：悠々自適とは言いませんが、自分で実験の手を動かさなくなると、やる仕事はレビューを書いたり論文に手を入れたり、時には研究費の申請書類を書いたり、そのくらいになりますよね。あとは講演のために国内外にいろいろ行きます。

小林：坂口先生は趣味が哲学だと聞きましたけど。

坂口：それは少し言い過ぎで、そういう話が好きだったということと、多少は自分たちのやっていることに意味づけをしたい、しようとしていた、というくらいの話です。

小林：でもお名前が「文」、文化を志す。絶対この子には文系の研究者になってほしいという親御さんの気持ちが見えます。

坂口：いや、そうではなくてですね、一応父の方針としまして「名前というのは他と区別するためにつけるのだから、他にはない名前をつけておけ」という、きっとそのあたりが真相だと思います。

小林：ちなみに大隅先生は、休日はどのようにお過ごしでしょうか？

大隅：庭に出て草を取るとか、そういうことが一番多いですかね。

小林：昔、先生と基礎生物学研究所で一緒にしていた頃は、夜は活発になるというか、お酒を飲んで皆と語り合うのが大隅研究室の伝統という感じでしたよね。

大隅：人数が多かったこともあるし、そういうことが許された時代だったという気がしますね。私は酒を飲みながらワイワイと研究の話ができる雰囲気がとても好きなので、研究室や大学で「飲んではいけない」という雰囲気はいかがなものかなと、少し反抗したくなりますね。

小林：ですね。おっしゃるとおりだと思います。私もそっち派です。

ノーベル賞を目指す若い研究者へ

「時代の大きな課題に自分なりにチャレンジする」(坂口)

小林：さて、お二人のノーベル賞を受賞された先生方を前にしていますので、対談をお読みの皆さんの中には、将来ノーベル賞を取りたい、先生方のように大発見をしたいと思っている方もおられると思います。その方々に向けて「ノーベル賞を取るための傾向と対策」のようなものがあれば伺いたいと思います。同じように研究していても取る人と取らない人がいます。自分がこういうところは恵まれていた、ここは頑張った、というようなポイントがあれば、ぜひ伺いたいのですが。

坂口：そうですね。私は免疫学に興味を持ってこの仕事をやっていますが、免疫という学問は基礎的な発見、知見が人の疾患と結びついていて、基礎研究と応用の距離が短いんですね。例えば抗体がどうやって作られるかということが、ワクチンを作るということにつながっていく。また、私たちの研究テーマである「免疫系がなぜ自分に反応しないか」と

という問いは、裏返すと、「どのようにしたら癌細胞に対して反応させるのか」とか、実際的なところと結構距離が短いということです。

そう考えると二つありまして、「人の疾患を解決できる」という野心を持った人はノーベル賞に近いかもしれませんが、また、その背後にある生物学的な原理、リンパ球の世界や免疫を超えた原理が何かあるとするならば、そうした本質的に重要な発見を目指すという野心を持たれてもいいと思います。

ただ一つだけ指摘したいのは、サイエンスの世界には「何が重要か」というある程度のコンセンサスがあるんですね。そうでないと客観的な評価ができませんから。サイエンスの歴史、例えばイギリスは日本よりもう少し歴史が長いのですが、「なぜ免疫が自分に反応しないか」という疑問はずっと続いている。その時々テクノロジーを使ってチャレンジしていくと、そこからスピノフしてさまざまなものが生まれます。例えば、モノクローナル抗体や新しい免疫抑制剤が開発され、さらにその先でシグナルパスのような新しいものが見つかることもある。そういうことがいろいろ起こるんですね。

つまり、そういう重要なことというのは、ある程度サイエンスの世界では共通感覚としてあると僕は思います。そういうものをその人なりにチャレンジしていく。チャレンジの仕方は一つではありませんから。その時代の大きな課題に対して自分のやり方で挑む。その人なりのやり方で取り組むことが、僕は非常

に重要だと思います。「ノーベル賞の取り方」と言われるなら、そういう点が評価されるのではないのでしょうか。

小林：なるほど、自分がやりたいことを見つけて、自分なりにそれに向かってチャレンジする。それがまたより重要なものに結びついていく。ありがとうございます。大隅先生はいかがでしょう？

ノーベル賞を目指す若い研究者へ

「自分で『流行』を作り出す、
くらいの意識で」（大隅）

大隅：私はいろんなところで言いますが、流行りというのは今、流行りなんです。流行りから少し外れて「人がやらないことをやろう」というのがノーベル賞への近道だと思います。私は酵母で誰も見向きもしなかった液胞からスタートしましたし、タンパク質分解も私が始めた頃はそんなに重要視されていませんでした。そういう意味では「華々しく、今すぐ流行りだから自分もそこに乗り遅れたらいけない」という意識では研究しない方がいい。むしろ「自分で流行りを作る」というぐらいの意識で、新しいことにチャレンジすることが、とても大事なことになるのかもしれないと思います。

小林：今のお二人のご意見は、多くの若い研究者の心に響いたと思います。坂口先生のノ



大阪大学特別荣誉教授
坂口志文氏

1951 年生まれ

免疫系の“ブレーキ”として働く制御性 T 細胞（Treg）を世界で初めて発見・解明した免疫学者。

2025 年ノーベル生理学・医学賞受賞。

京都大学で医学博士を取得後、米国で研究、帰国後は日本国内の研究機関を経て、現在は大阪大学 特別荣誉教授／免疫学フロンティア研究センター 特任教授（常勤）として研究室を率いる。Treg の研究を通じて、自己免疫疾患、アレルギー、がん免疫、移植医療など多様な臨床応用の道を開いた。

ーベル賞受賞が発表された晩の記者会見を、私は食い入るように見ていましたけれど、その時に基礎科学が重要である一方、日本の基礎科学は危ないのではないかとおっしゃっていました。両先生に、日本のサイエンスの現状と今後の在り方についてお伺いしたいと思います。まず坂口先生から見て、日本のサイエンスは現在どのような状況にあるとお考えですか。

科学研究に経済的支援を(坂口) 精神的にも恵まれた環境を(大隅)

坂口：私が判断できるのは生物学、医学領域になるかと思いますが、ニュースでも時々目にするように、日本の科学力というのを論文の量と質という形で捉えるならば、どんどん下がっています。Nature 誌が「日本のサイエンスは今やワールドクラスではない」というようなことをわざわざ書いたこともありました。そうした指標で見る限り、確かに落ちてきていると思います。

その裏付けになる指標を探すと、サイエンスに対する経済的支援が先進国、例えば G7 の中でも最も小さい。これは統計的に間違いない事実で、それはなんとかしようと思えばできるわけですから、まずはそこら辺を考えなければいけません。やればできることですから。

小林：そうですね。大隅先生、何か付け加えることございますか？

大隅：研究者が「自分の人生で選んだ研究の道は楽しい」と言えるように、外から見ても「いい職業だな」と思えるようになってほしい。研究費が潤沢にあるということは大事な条件ですが、大学の先生は研究以外の仕事が多すぎて、やりたいことに取り組めない状況があります。そういう現状を見ている若者は「もっと別の道へ進もう」という判断になってしまう。精神的にも経済的にも、研究者がもう少し恵まれる環境が必要だと思います。

一方で中国の研究者を見ると、非常に優遇されていて、報酬は一般の 1.5 倍ぐらいが平均で、それが今、中国では研究が大きく発展している要因の一つでもあると思います。

小林：昔は生命系の大学院では、修士課程の学生は大体博士課程に進みました。今は私の学生でも修士で辞める学生がおそらく半分以上です。「あなたは優秀だから博士に進んで研究者を目指したら？」とよく勧めます。そうすると言われるのは「先生、冗談はやめてください」。「何で？研究が面白いからこの世界に来たんでしょ？」と聞くと、「そうなんです、やはり会社の方がいいから」とか言うんです。そこで、「じゃあ何が違うの？」と理由を聞いてみたら、「言っていないんですか？ボスのキラキラ感が違う」と言う。キラキラしていない、少し疲れて見えるようです。

先ほど坂口先生がおっしゃっていたように、グラント書き（競争的研究資金申請書）や研

1945 年生まれ

細胞内で不要物を分解・再利用する“オートファジー”の仕組みを世界で初めて解明した細胞生物学者。

2016 年ノーベル生理学・医学賞受賞。

東京大学で博士号取得後、基礎生物学研究所、東京工業大学などで研究を主導。現在は東京科学大学創成財団理事長として、基礎科学の振興と若手研究者の育成に尽力している。



東京科学大学名誉教授
本財団理事長 大隅良典

究以外の仕事や雑務が結構多い。また日本の研究者には定年があり、国立大学は 65 歳。お二人は例外ですが、通常、私どもは 65 歳で辞める。そこから中国も含めて外国の研究機関に行かれる方が少なからずおられます。もったいないなというか、日本の科学力がどんどん低下している中で、そんなことでいいのかなと思ったりもするんですが、どう思われますか？

「研究者の 65 歳定年は損失、働ける限り居場所と待遇を」 (坂口)

坂口：確かに。色々な機会に若い人への支援が重要と言われますが、同時に本当に言いたいのはシニアの方です。今は 75 歳くらいまで、まだまだ働ける人は多いです。もちろん体力や知力は少しずつ落ちてきますが、これまでの経験や考え方には、若い世代に伝えられるものがあります。日本の場合、65 歳で定年になると、それは大きな損失だと思っています。

外国の例を出すのが良いのかわかりませんが、例えばアメリカではエイジズム（年齢に基づく固定観念、偏見や差別）を嫌います。一方、日本では、新聞記事を含めさまざまな場面で年齢が出てくることが多いように感じます。原則、働ける限りは、それなりの場所と待遇を受けられるような、そんな社会にすべきであらうと思います。日本もそうなってほしいと思います。

小林：大隅先生、何か付け加えることは。

大隅：おっしゃる通りで、定年が到来したからといってその人の研究を否定するべきではないと思っています。

小林：若い人の中には、上の人に早く辞めてほしいと思う人もいるかもしれませんが、実

はその定年から遡って多くの仕組みが決まっています。例えば研究費、グラント申請を出せる年齢、「若手枠」は 45 歳まで。なぜ 45 歳かというと、定年まで 20 年だから。定年がなければ若手枠も不要で、もっと自由に長期ビジョンの研究計画ができる。しかし定年で切られているために、そこから遡って全て決まっている。これは良くないなと私は思います。

坂口：政府としては定年を 65 歳まで延長しました。しかし、その分若い人のポジションが減ってしまいました。要するにゼロサムですね。

小林：定年導入時はそういう構造だったようで、それをどう解決するか。定年は延ばして働ける人は働くべき。同時に若い人で独立したい人はそのようにできるようサポートすべき。日本がこれから乗り越えるには、どちらかを捨ててどちらかを活かすのではなく、両方生かさなければなりません。特に生命科学のような、割と大きな枠で皆と研究する分野では、シニア、中堅、若手それぞれがバランスよく活躍できないと成果を出すのは厳しい。

「2、3 年ではなく 10 年先を考えられるような若手支援を」 (大隅)

大隅：私も時々言いますが、今、政府が言う「若手支援」というのは、本当の意味での支援にはなっていません。若い人が夢を持ち、先の 10 年を考えられるような支援なら重要ですが、2～3 年の研究費を出したから支援したよ、というのとは少し違います。若手支援という言葉の響きは良いですが、「若い人が何に悩んで、どうして研究者の道を選ばないのか」ということを見つめた政策をしてほしいと思います。

小林: 上の人が頑張っている姿を見せないと、若手はそんな世界に来ませんよね、私もそう思います。政府は、先生方が基礎科学でイノベーションを起こしたりノーベル賞を取ったりされると「日本の科学技術はすごい」と勝ち誇ったように言いますが、先生方が若くて自分でばりばり研究されていた時代と、今はちょっと違います。今のペースで毎年何人もノーベル賞を取る状況が続くでしょうか。

大隅: 今回受賞された坂口先生も北川進先生（ノーベル化学賞）も、私たちと近い世代で、戦後の日本の中で、さまざまな制約はあったものの、恵まれていたとまでは言いませんが、そうした時代に研究生を送ることができた方々です。当時は、今ほど成果を求められたり、短絡的な成果主義のようなものに惑わされたりせずに研究ができた世代でした。お二人が受賞されて、まだたくさん候補になる方もいらっしゃるので、ノーベル賞は続くかもしれないと思いますが、若い人にどうバトンタッチができるかということが一番大きな問題かなと思います。

小林: そうですね。今から 20 年ぐらい前に絶好調で研究されていた方が今ノーベル賞を取られている。では今の方が 20 年後にどうなるかということ、自分も含めてかなり不安なところがあります。だからこそ基礎研究に対するサポートというのはかなり重要です。ここで安心してはいけません。

坂口先生にお聞きしたいのは、「高い頂に登ると、今まで見えなかった世界が見える」と言います。大隅先生の場合には、基礎研究支援のために大隅基礎科学創成財団を作りましたが、先生の今後のご予定はいかがでしょうか。

「スタートアップで研究成果の社会実装を進めたい」（坂口）

坂口: 私の場合は医学ですので、やはり医療への応用を考えます。それで、スタートアップの「Regcell（レグセル）」にも関わっています。これまでずっと公的資金で研究を続けてきましたが、医療に近いところに行くと、公的資金だけではなかなか難しいんですね。金額の面でも、期間の面でも足りません。ですので、やはり社会にアピールして投資を受け、スタートアップのような形で研究成果を実装化していく、つまり社会実装していく、そういう形が必要になります。差し当たっては、そうしたことを前に進めていきたいと思っています。

また、大隅先生がされている基礎科学の振興についても、今回いただいた賞金を活かして、何かできればと思っていますが、まだ今のところ考える余裕がなく、面白い形での貢献ができればなとは考えています。

小林武彦東京大学教授（左端）
1963 年生まれ

1987 年九州大学理学部生物学科卒、92 年同大学院で理学博士、基礎生物学研究所、米国のロッシュ分子生物学研究所や NIH 研究員などを経て 2006 年国立遺伝学研究所教授、18 年から東大定量生命科学研究所教授。「生物はなぜ死ぬのか」（講談社新書）、「なぜヒトだけが老いるのか」（同）などの著書多数。



小林：大隅先生からは今後のご予定、あるいは財団の現状などのご報告がありましたらお願いいたします。

大隅：私の財団の特徴の一つは、研究者が財団の周りにたくさん集まってくれていることです。もう一つは、民間企業の研究者とも協力して、日本の科学の現状を変えられないかと考えて活動している点です。つまり、企業の研究者と連携しながら取り組むことをスタートから意識していました。そのため活動の幅がいろいろと広がってきています。私たちのような小さな財団でも、やるべきことは非常に多いと感じています。だから、さまざまな立場の人が、それぞれの財団のような組織を立ち上げるのは良いことだと思っています。

小林：そうですね、坂口先生と一緒にできることがありましたら、ぜひお願いしたいです。

大隅財団も来年で 10 周年。早いですね。普通、グラントを出して支援する財団というのは、大きな製薬会社やスポンサーがついていますが、大隅財団の場合はそれなしで、大隅先生ご自身が会社を回ってお願いし、資金集めをされている。見ていて大変だなといつも思っています。でも、それに賛同する研究者がお手伝いして、私もその一人で、なんとか 10 年やってきました。大隅先生はとても楽しそうに財団運営をされています。

ぜひ、坂口先生にも何かしていただけると、基礎研究者の一人として非常にありがたい限りです。今日はお忙しいところ本当にありがとうございました。

坂口：ありがとうございました。

坂口志文氏略歴

1976 年 京都大学医学部医学科卒業、同大学大学院医学研究科入学
1977 年 愛知県癌センター研究所実験病理部門研究生
1980 年 京都大学医学部研究生
1981 年 京都大学医学部附属病院医員
1983 年 博士（医学、京都大学）、ジョンズ・ホプキンス大学卒業研究員
1987 年 スタンフォード大学客員研究員
1989 年 スクリプス研究所免疫学部助教授
1991 年 カリフォルニア大学サンディエゴ校客員助教授
1995 年 東京都老人総合研究所免疫病理部門部門長
1999 年 京都大学再生医科学研究所教授
2007 年 同研究所長
2011 年 大阪大学免疫学フロンティア研究センター教授
2013 年 大阪大学特別教授
2016 年 同大学名誉教授、免疫学フロンティア研究センター特任教授(常勤)、
京都大学名誉教授
2017 年 大阪大学栄誉教授
2025 年 同大学特別栄誉教授

主な受賞歴

2003 年 持田記念学術賞
2004 年 William B. Coley Award
2005 年 武田医学賞、高峰記念三共賞
2007 年 文部科学大臣表彰科学技術賞
2008 年 上原賞、慶應医学賞
2009 年 紫綬褒章
2012 年 朝日賞、日本学士院賞、米国 National Academy of Sciences 外国人会員
2015 年 Maharshi Sushruta Award、Gairdner International Award（ガードナー国際賞）、中日文化賞、
トムソン・ロイター引用栄誉賞
2017 年 The Crafoord Prize（クラフォード賞）
2019 年 文化勲章
2020 年 ロベルト・コッホ賞



2025 年 11 月 2 日
京都ガーデンパレスに於いて

対談の動画は 2 月中に財団 HP で公開予定です。ぜひご視聴ください。

* 今回の対談は、中日新聞社様ならびに大阪大学様の多大なるご協力のもと実現いたしました。この場をお借りして、心より感謝申し上げます。

寄付の広がりに関するご報告

いつも当財団の活動にご支援を賜り、誠にありがとうございます。

大隅の挨拶にもありましたが、この半年の間に、思いがけず多くの方々からのご寄付をいただく出来事がありましたので、財団事務局より、ご報告申し上げます。

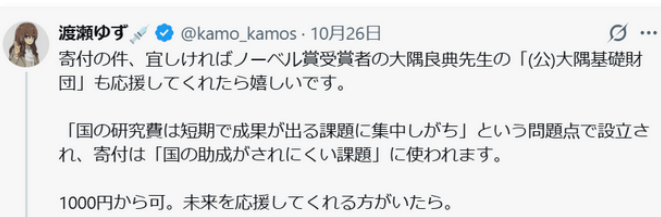
昨年の10月下旬、SNS(X/旧 Twitter)のある投稿をきっかけに、わずか半月ほどで、約1,700件もの個人寄付をいただきました。

件数だけで見ても、これは昨年度一年間の個人寄付件数(約400件)の4倍以上にあたります。

最初にその兆しに気づいたのは、10月26日深夜に寄付をお申込みくださった方の備考欄に記された「“X, @kamo_kamosの投稿”」という一文でした。

確認したところ、2025年10月26日に渡瀬ゆずさん(@kamo_kamos)が投稿されたXが多くの方に拡散されておりました。投稿の内容は弊財団への寄付の呼びかけでした。

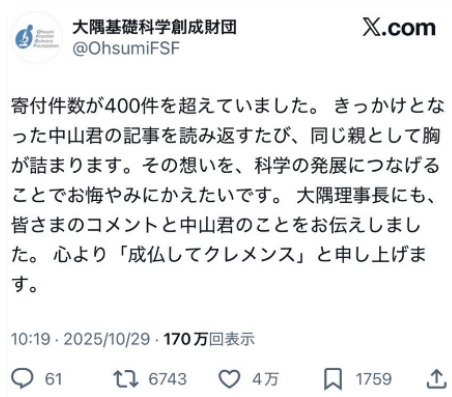
Xの内容を遡って拝見して、今回の寄付急増のきっかけとなったのが10月12日に稀少ガンで22歳の若さで亡くなった北海道大学の中山さんの最後のXへの予約投稿『グエー死んだンゴ』(*1)に関連するものと分かりました。



彼のこの投稿がきっかけとなってガン関係の研究施設への寄付が急増しました。そこへ、左記の投稿で基礎研究の重要性を広めてくれたのが渡瀬ゆずさんでした。

10月27日の朝は15-16件ほどのご寄付だったのですが、その後、寄付はさらに広がり、180件、400件、800件…と日を追うごとに増加し、半月ほどで1,700件・総額860万円ほどに達しました。

財団としまして、Xにて当ムーブメントについて右記のように投稿しましたところ、複数のメディアの目に留まり、更なる寄付につながりました。因みに、投稿内にある『成仏してクレメンス』(*1)は、中山君の「グエー死んだンゴ」に呼応するネットスラングです。



SNSはその悪い面が取りざたされることが多いですが、今回の広がり、SNSを通じて一人一人の善意が共鳴し、科学を支えたいという思いが社会の中に根づいていることを実感させてくれる出来事でした。

改めまして、この機会にご寄付くださった皆さま、そしてきっかけをつくってくださった方々に、心より感謝申し上げます。

今回の件は、科学の未来を思う多くの方々が共に動いてくださった出来事として、理事長はじめ、財団一同、大きな励ましとなっております。

*1:「グエー死んだンゴ」「成仏してクレメンス」とはネット上で煽りを受けた際に、「グエー～」と投稿して死んだふりをした時に、「成仏して～」と返信をするネットスラング。

【SNS を利用した今後の展開に向けて】

クラウドファンディングに挑戦

当財団では、2026 年よりクラウドファンディングと YouTube を活用した基礎科学発展のための動画配信を開始いたします。

第 9 期には 219 件の研究助成申請を頂戴し、そのうち採択は約 6% の 13 件にとどまりました。財団の現有の財源では支援の手が届かない基礎研究者が数多く存在することを改めて痛感しております。そこで、支援の裾野をさらに広げるべく、今回初めてクラウドファンディングに挑戦する運びとなりました。

YouTube の配信開始

第 1 回目の YouTube 配信では、本レターでご紹介している特別対談の内容をお届けします。本動画は 2 月中に財団 HP にて公開予定です。ぜひご視聴ください。

今回の X での広がりや、まさにこれら SNS での取り組みに先立つ思いがけない「はずみ」となりました。SNS を通じて人々の関心や共感が瞬時に広がる力を改めて感じ、基礎研究支援の想いをさらに広げる努力につなげてゆく所存でございます。

また SNS の本格的な活動開始に先がけて、当財団の理念や活動を紹介する短い動画を制作いたしました。ぜひ右記の QR コードよりご覧ください。



皆さまの温かいご支援と応援が、私たちの活動の原動力です。

これからも「基礎科学の芽を育む」ために、研究者と社会をつなぐ架け橋となれるよう努めてまいります。今後とも変わらぬご支援のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

事務局 SNS 担当

SNS 経由の寄付申込者の声（一部）を紹介します。

基礎研究の価値・ 長期性を訴える声

「すぐ役に立たなくても、未来を支える」という思想
「手っ取り早く結果だけ欲しい、という即物的な国の考え方に疑問を持っています。基礎固めに使用していただけると嬉しい」
「すぐに実って巡る果実ではなく、やがて緑なす大地となっていく砂漠に撒かれる種子との一つとして活用ください」
「さまざまな人たちを支え、救い、未来と希望を持って照らす花（成果）は、広い豊かな土壌（基礎研究）からしか咲かない。みなさまが心置きなく研究できるよう、お役に立てれば」
「今すぐには役に立たないことでもぜひ続けてほしい、余白のあるところにこそ新しいものが生まれると信じています」

「長いこと基礎研究が軽視され、日本の力が衰退することを大変懸念しています。少額ですがお役に立ちますよう」

「理学修士を持っていますが、基礎研究の重要性をわかりつつ理解されない歯痒さを感じており、近年の研究機関に対する予算削減等を憂慮しておりました。SNS のムーブメントに寄せて少額ですが応援させていただきます」

「仕事柄、大学の研究室とお付き合いがあり、基礎研究に予算がつきづらい現状に憤りを感じていました。少しでも手助けになり、日本の科学の発展につながれば幸いです」

日本の研究環境・
政策への危機感
「基礎研究軽視」
「予算削減」への
憂慮

研究者・元研究者と しての実体験から

「研究を続けられなかった側」からの支援
「博士号をとったもののポストがなく研究を断念した者として、基礎研究への助成に些少ながら寄与できればと」
「私自身も研究をしましたが、年々、締め付けられるような研究環境となり、早期に大学教員を辞めました。若い研究者の方々のお役に少しでも役立てば」

「私自身病気になり、毎日薬を飲んで治るかわからない不安な日々が続きましたが、中山さんの記事に勇気を与えられ、生物学などの分野の基礎研究の発展に微力ながら協力できればと」

「身近な家族を早くに失うという深い悲しみを経験しました。医療・研究機関において行われた検体に関する式典の場で、『科学への貢献』という労いの言葉をかけていただきました。このお言葉ほど慰められるものはありません。以来、わずかでも広く『科学』に尽くしたい気持ちがあり、寄付に至りました」

科学に救われた個人
的体験・感謝 「科学
への恩返し」「人生経
験からの共鳴」

次世代・未来への まなざし

「子ども・若者・将来世代のために」
「大学では農芸化学を学び、現在は家庭を持つ立場として、化学に育てられつつ、自分と子供の将来を考えた際、未来に残るお金の使い方をしたくなりました。どうか子供たちの光となる研究に使っていただけますように」
「高校の教員として科学の道を志す生徒たちの未来が少しでも明るいものとなりますように」

「過去の基礎研究が今を支えている」

「大学で化学を学び、現在は実務に携わっています。これまでの皆さんのおかげで、分析からわかることがあります。わずかですが将来のための基礎研究に役立ててください」

実務・現場で基礎研
究の恩恵を実感

第 8 期

(2024 年 8 月～2025 年 7 月)

活動報告

■ 1. 事業の実施状況

経常費用の 8 割以上を、基礎研究の助成事業と研究者と社会との連携事業に充当しました。

① 基礎研究の助成事業

第 8 期（2024 年度）は公募にて応募を受け付け、厳正な審査のうえ 60,000 千円の助成を実施しました。従来と同規模の助成額を確保し、日本の基礎科学研究の深化に貢献しました。

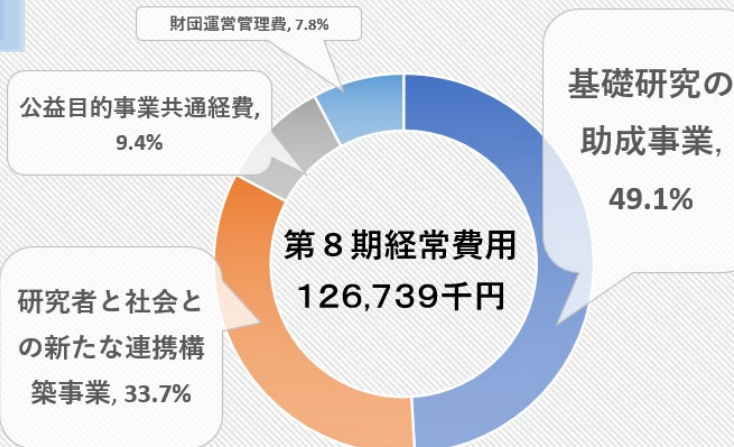
② 研究者と社会との連携事業

研究と社会をつなぐ取り組みとして、

◆「創発セミナー」を計 8 回（対面・オンライン）開催しました。

◆「微生物機能探究コンソーシアム」において、企業・研究者との関係構築を推進しました。

◆市民講座・小中高生と最先端研究者とのふれ合いの集い等、多様な活動を行い、基礎科学の面白さや重要性を伝えるイベントを開催しました。



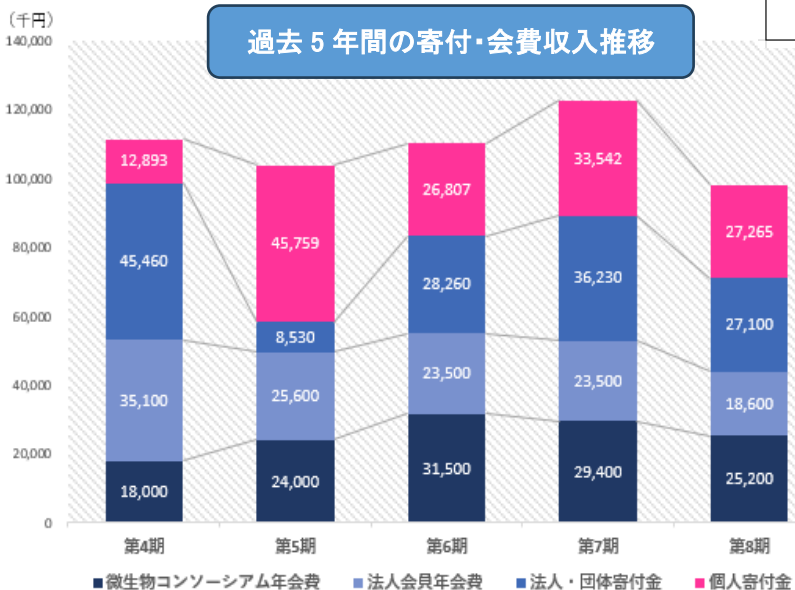
■ 2. 寄付・会費の状況（第 8 期実績：2024 年度）

多くの皆さまからご寄付や会費など、温かいご支援をお寄せいただきました。

皆さまのご厚意に、心より感謝申し上げます。

（内訳は右記のとおりです）

寄付、会費収入（第8期）	金額（千円）
個人寄付金	27,265
法人・団体寄付金	27,100
法人会員年会費	18,600
微生物コンソーシアム年会費	25,200
合計	98,165



多くの皆さまからのご支援により、私たちはこれまで活動を続けてくることができました。しかしながら、安定的な運営を維持していくためには、継続的なご支援がこれまで以上に重要となっています。今後の活動を支えるため、引き続き温かいご支援を賜いましたら幸いです。

決算書、事業報告等の詳細につきましては、財団 HP (<https://www.ofsf.or.jp/summary/info.html>) をご覧ください。

研究助成

(1) 第 9 期 研究助成贈呈式

大隅基礎科学創成財団は 2025 年 12 月 15 日午後 3 時から東京科学大学すずかけ台キャンパスで第 9 期研究助成贈呈式を行いました。基礎科学（一般）分野 10 名、同酵母分野 3 名の計 13 名の研究者に大隅良典理事長から贈呈書が手渡されました。



第 9 期 研究助成贈呈式

東京科学大学すずかけ台キャンパス会場にて

午後 4 時からはハイブリッド形式で創発セミナーを開催しました。冒頭の挨拶で、大隅理事長がこの財団は大きな原資を持っておらず、様々な形で寄せられた寄付によって支えられていること、また第 9 期より基礎科学一般で少額の応募枠を増設したため 219 件もの応募があったこと、厳正な審査の結果、今回の 13 名が選ばれたことなどを述べました。

続いて、基礎科学（一般）の吉田賢右選考委員長が「年々応募者が増加しており、15 名の審査員による厳正な審査が行われた。また、基礎研究の性質上、提案されたプロジェクトがそのまま実現するとは限らないが、この助成金が研究の発展の礎になることを期待する」と助成者を激励しました。

さらに酵母分野の松浦彰能選考委員長からは「34 件の応募があり、新しい生理現象を発見した研究者や、それを追求する研究者を選定した」との報告がありました。

続いて木村宏 東京科学大学 総合研究院 教授を講師とした創発セミナー（詳細は本誌 15 ページに掲載）と 13 名の研究助成採択者からそれぞれ助成への謝辞を交えた自己紹介と研究テーマの簡潔な説明がありました。セミナー後には懇親会があり、午後 8 時に一連の行事を終えました。

理事 大谷 清

(2) 第9期研究助成採択者及び研究課題

基礎科学（一般）

氏名	所属・役職	研究課題
荒木 喜美	熊本大学 生命資源研究・支援センター・教授	KRAB- ZFP 遺伝子群はなぜ高度に重複し数を増やす必要があったのか？本来の役割にせまる。
伊藤 悦朗	早稲田大学 教育学部 理学科 生物学専修・教授	「勉強とは勉めを強いること」を考慮した学習記憶の新規分子機構
大久保 範聡	東京大学 大学院農学生命科学研究科・教授	性染色体構成がメス型のオスメダカがモテないのはなぜか
大沼 耕平	島根大学 学術研究院農生命科学系・助教	ホヤ幼生の脳発生における神経細胞の分化と動態の分子機構の解明
荻野 肇	広島大学 両生類研究センター・教授・センター長	ゲノム重複に伴うエピゲノム抑制と遺伝子配列進化の実験的研究
澤 斉	国立遺伝学研究所 多細胞構築研究室・教授	体軸情報による細胞極性の方向制御
深澤 壽太郎	広島大学 大学院統合生命科学研究科・准教授	揮発性植物ホルモン様分子による成長促進制御機構の解明
藤瀬 賢志郎	金沢大学 医薬保健研究域 医学系・助教	シナプス超微構造の非神経細胞内再構成による形成機序解析
三宅 親弘	神戸大学 大学院農学研究科・教授	葉緑体チラコイド膜 $\Delta\Psi$ 形成を担う未同定電子伝達経路の分子実体の解明 ～フェレドキシンから PQ への電子流の実体に迫る～
吉本 光希	明治大学 農学部生命科学研究科・専任教授	植物オートファジーによる光受容体の品質管理 ～その分子基盤と生理的意義の解明～

基礎科学（酵母）

氏名	所属・役職	研究課題
神 唯	日本歯科大学 生命歯学部・講師	オルガネラは創られる：新規液胞生成分子基盤の解明
福田 良一	東京大学 大学院農学生命科学研究科・准教授	二形性酵母 <i>Yarrowia lipolytica</i> のユニークなコロニー形態の形成機構とその生物学的意義の解明
船戸 耕一	広島大学 大学院統合生命科学研究科・教授	代謝が関与する双方向膜交通の調節機構の解明

（敬称略・50 音順）

「遺伝子の発現とその調節を観て理解する」

東京科学大学 総合研究院 教授
大隅基礎科学創成財団 評議員 木村 宏 氏



■ 講演要旨 ■

生物のからだを構成する細胞はどれも同じ遺伝情報（DNA の塩基配列）を持っていますが、様々な種類の細胞ができるのは、使われる（発現する）遺伝子が異なるからです。遺伝子の発現には DNA から RNA への転写が必要ですが、この転写の様子やそれを制御するクロマチン構造の動態を生きた細胞で可視化できるようになってきました。最新技術を用いて明らかになってきた成果を紹介します。

講演内容は下記財団の YouTube をご覧ください。

動画 URL: <https://youtu.be/d6NKTD0mx3U>

■ 木村宏氏の略歴 ■

1996 年 3 月 理学博士（北海道大学）
1996 年 6 月 オックスフォード大学 サーウィリアムダン病理学部 博士研究員
2002 年 2 月 東京医科歯科大学 難治疾患研究所 助教授
2003 年 8 月 京都大学大学院医学研究科 先端領域融合医学研究機構 特任教授
2007 年 10 月 大阪大学 大学院生命機能研究科 准教授
2014 年 7 月 東京工業大学 生命理工学研究科 教授
2017 年 4 月 東京工業大学 科学創成研究院 教授
2024 年 10 月 東京科学大学 総合研究院 教授（現職）

以上

（2025 年 12 月 15 日第 9 期第 3 回創発セミナー）

大隅良典理事長が2025年11月22日、東北大学、東京エレクトロン（株）主催、大隅基礎科学創成財団など共催の「サイエンスカフェ in 仙台」に登場、仙台とその周辺の中学、高校に通う24人の生徒たちと1時間半にわたって対話、交流しました。

中高生からの主な質問と大隅理事長の返事を以下に紹介します。

——実験や研究で失敗したときはどうしたら立ち直れますか



大隅：よく聞かれるが、失敗とは何か、を考えて欲しい。科学に失敗はつきもの、うまくいかなかったときにそこから何を引き出すかが大切です。受験勉強は1つの答えに早く辿り着けるか、だが、科学は答えのないものにチャレンジすること。教科書には今までに分かったことが書いてあるが、「まだこんなにわからないことがある」と考えることも大事です。

——今、いろんな教科を勉強しているが、全てを勉強する意味はあるのですか

大隅：私の経験ではいろんな教科を満遍なく学ぶことが大事だと思う。よく数学は役に立つのか、と聞かれるが、数学を学ぶことは論理的な訓練をしていることで、研究に役に立ちます。苦手な教科も頑張って勉強してほしい

——自分の考えを人に伝える技術を磨くには？

大隅：たくさんの人、特に違う分野の人と交わって、自分が面白いと思ったことについていろんな意見をもらうのが大事です。中学、高校、大学、大学院、研究室と進むうちに「人の輪」がだんだん小さく、閉じていく傾向があります。みなさんには人の輪を広げる努力をしてほしい

最後に大隅理事長が、参加した生徒の皆さんに次のようなメッセージを送りました。

「今、日本のスポーツ選手の中に海外で活躍する人がたくさん出てきたように、科学の世界でも出てきてほしい。研究をしていると毎日あるわけではもちろんないが、自分の疑問がある瞬間に解けることがある、それが科学の醍醐味です。そのためにはもちろん粘り強くなければならないし、どこかで「楽しさ」を経験するような成功体験をしてほしいと思います。

それと教科書だけから学ぶのではなく、自然と親しみ、自然の中から不思議なことを見つけてみよう。地球的な課題を解決するにも自然と接することが大事ですから」

今回の「サイエンスカフェ in 仙台」は東北大学青葉山新キャンパス青葉山コモンズを会場に開かれました。主催していただいた東京エレクトロン（株）、東北大学研究推進・支援機構知の創出センター、共催の東北大学大学院農学研究科、協力していただいた仙台市教育委員会/特定非営利活動法人 natural science と同法人代表でモデレーターを務めていただいた大草芳江様他の皆様に感謝いたします。



理事 大谷 清

微生物機能探究 コンソーシアム 活動報告



東京農業大学 世田谷キャンパス 横井講堂にて
2025 年 11 月 13 日 第 15 回 全体会

微生物機能探究コンソーシアム（以下、コンソーシアム）は、2020 年 12 月の設立からちょうど 5 年を経過しました。これは、大隅理事長の肝入りにより、微生物学分野におけるアカデミア研究者と企業研究者の新たな協力関係の構築を目指した、他に類を見ない活動です。また、コンソーシアムは研究対象の微生物や目的に応じて分断されることが多い微生物学分野の横断的な結集も目指しています。アカデミア側は 4 つのグループ（当初は 3 つ）として、定例会や全体会を主催するとともに、グループ独自の活動を進めています。一方、参加企業（年度によって変化しますが、十数社）の研究者はグループごとに参加し、定例会や全体会で質疑します。全体会と一部の定例会は対面形式で開催し、研究者間の密な議論をしています。

G1（リーダー：田中寛）は普遍性、とくに微生物の活性や増殖にかかわる DNA 複製やタンパク質合成をテーマとしています。これは微生物の多様な機能を支える基盤であり、これを理解することで自在に操ることを目指しています。すでにいくつかの企業と共同研究を開始しています。

G2（リーダー：大西康夫・跡見晴幸）は微生物の多様性、とくに多彩な環境への微生物の適応戦略や多様な機能、微生物と昆虫や植物との生物間相互作用などをテーマとしています。アカデミアで進行中のいくつかの研究を紹介することで、企業研究者に興味をもってもらい、これを契機に共同研究も始まっています。

G3（リーダー：野尻秀昭）は微生物の相互作用、とくに抗生物質耐性菌の原因ともなるプラスミド DNA の接合による細菌間の伝播などをテーマとしています。また多剤耐性菌を含む緑膿菌のプラスミドのデータベースを構築するプロジェクトを現在進めています。これは細菌間の伝播能を含めたプラスミドの分類を目指しており、2026 年 3 月までに公開予定ですが、その後も継続的に改訂、拡張します。このプロジェクトはコンソーシアムの有志の企業の追加支援をいただいたことで初めて実現しました。

G4（リーダー：成川礼）は微生物の光合成・光環境応答を中心とした話題を取り上げています。直近の全体会では食用スピルリナの基礎から応用研究の講演と質疑をしました。光合成の代謝や進化は他の微生物とは異なることが多いので、そのギャップを埋めながら議論を進めています。また、アカデミア間のつながりをベースに大型の研究費の取得を目指し、すでに成果もあげています。

今後も定例会や全体会での話題の枠をさらに広げるとともに、企業との共同研究も拡充していきたいと考えています。また、企業からの企画の提案を募り、従来とは異なる交流も始めたいと考えています。コンソーシアムへの参加を希望される企業は、財団事務局までご連絡ください。

また、コンソーシアムの活動をベースに、2024 年度より LinkedIn による微生物学者の情報ネットワークを構築し、拡充を進めています。さらに、2025 年度より地方会議（第 1 回：中国四国地区、第 2 回：北関東地区）も開催しています。これら微生物研究者の交流を促進することで、日本の微生物学研究を後押ししていきたいと考えています。

なお、コンソーシアムの活動の詳細やメンバーは財団ホームページの「財団の活動」(<https://www.ofsf.or.jp/activity/consortium.html>)をご参照ください。

理事 池内 昌彦

ニュートンがリンゴが木から落ちるのを見て、万有引力の発見につながったという有名な逸話がある。基礎科学研究の始まりともいわれる。自然を深く観察し、すぐに役立つ技術ではなく“仕組みそのもの”を理解しようとする姿勢は、今日の基礎科学研究にもそのまま受け継がれる。

我々の暮らしを大きく変えるイノベーションも、実はこうした基礎科学から得られる知見の積み重ね無しには生まれない。基礎科学研究者は自然と向き合い新たな知見を得、企業や応用研究者はその知見を技術へとつないでいく——この明確な役割分担と「知のリレー」があってこそ社会は発展していく。しかも基礎科学で得られた知見は、当初は誰も予想しない形で産業化や生活に結びついていく。

例えば、2020年にノーベル化学賞を受賞した「ゲノム編集技術（CRISPR-Cas9）」も、元をたどると、スペインのとある地方大学の大学院生が、「ある種の細菌は、なぜ極端に高い塩濃度の塩田でしか生きられないのか？」という素朴な疑問から始めた研究だった。その細菌の持つ独特な DNA 配列に答えがあると仮定し研究する過程で、後に「CRISPR」と呼ばれる同一配列とランダムな配列が繰り返し現れる不思議な領域を発見する。前後して同様の領域が他の細菌でも報告されるに至り、青年はこの領域に塩耐性を超えた重要な役割が隠されていると確信、強い興味を覚える。

インターネット検索もない時代、彼はひたすら日課として DNA データベースを検索。その領域のランダムな配列の正体は、後に「細菌自身に感染するウイルスの DNA 配列の一部」と驚きの結末を迎えることになるが、答えを得るまでなんと 13 年も費やしている。「細菌にもウイルス感染を記憶し、再感染を防ぐ仕組み（獲得免疫）」が存在すると報告されると、研究は一気に進む。感染したウイルスの DNA を細菌が切断する仕組みを応用した技術が、ノーベル化学賞受賞につながった「ゲノム編集技術」となる。

一方、この『CRISPR』の知見は、発酵乳製品産業にも、イノベーションをもたらす。生産工程にウイルスが混入すると、発酵は進まず全て廃棄となる。企業で発酵工程の品質改善を担当する研究者が、とある学会で、「CRISPR 配列が菌株の分類、同定に応用可能」との知見を得た。自社菌株で確認したところ、菌株内に、過去に感染したウイルスの DNA 配列の一部が、CRISPR 配列として蓄積されていることを見出す。さらに、付加された配列を除去するとウイルス耐性が失われ、逆にその配列を菌株に付加すると、ウイルス耐性が付与されることを突き止めた。

この発見により、CRISPR を調べて発酵菌を選択すれば、ウイルス混入による原料廃棄を無くし、世界中で安定した乳製品製造が可能となった。今日、ヨーグルトであれチーズであれ、我々が世界中で口にするほぼすべての製品が、この技術の恩恵を受けている。

因みに、この技術を確立した企業は、2011年に米国デュポン社に 63 億ドルで買収されている。まさに、誰もが予想だにしなかった“出口”での実用化に結びついたイノベーションで、その産業的価値の大きさが分かる。

このように、基礎科学研究の知見が産業化に結びつくまでには、10 年、20 年あるいはそれ以上の年月を必要とする。だからこそ、基礎科学の支援は短期的成果を求めるのではなく、「未来の社会的価値を生むための投資」と捉え、幅広く長期に渡って続けることが肝要なのである。

【参考図書】 「ゲノム編集の世紀」ケヴィン・デイヴィス著、田中文訳 早川書房

理事 竹重一彦

2026 年財団イベント予定

3 月 22 日 (日)

「第 11 回 小中高生と最先端研究者とのふれ合いの集い in 愛知」 開催

大隅基礎科学創成財団は、**2026 年 3 月 22 日 (日)** に「第 11 回小中高生と最先端研究者とのふれ合いの集い」を愛知県で開催します。共催は公益財団法人理数教育研究所です。今回は、**岡崎市（せきれいホール）をメイン会場、名古屋市（名古屋市立大学 桜山キャンパス）**をサブ会場として実施します。メイン会場の岡崎市には、大隅良典理事長がノーベル賞受賞につながる「オートファジーの分子機構」の研究を行った基礎生物学研究所（基生研）があります。

講演プログラム

<岡崎会場>

- 基礎生物学研究所 森田（寺尾）美代 教授
「暗い中でも空を目指す～植物が重力を感じるしくみ～」
- 大隅基礎科学創成財団 大隅良典 理事長
「小さな酵母に問いかけて 40 年」

<名古屋会場>

- 名古屋市立大学 郡健二郎 理事長（前学長）
「未来を切り拓くあなた方に期待を込めて」

* 大隅先生の講演はライブ配信され、名古屋会場でも視聴できます。

科学体験ブース

講演後は両会場科学体験ブースに移動し、小中高生に実験や観察を体験していただきます。今回の特徴は、地元高校の SSH 部や科学系クラブが、両会場合わせて 13 ブースを出展する点です。さらに、科学教育に取り組む企業も出展します。ブースでの体験中、岡崎会場では名古屋会場で行われた郡健二郎先生の講演をビデオで視聴できます。同様に、名古屋会場では岡崎会場で行われた森田（寺尾）美代先生の講演を視聴できます。

参加には事前申し込みが必要で、各会場 先着 500 名 です。現在、協賛幹事である新興出版社啓林館のご協力のもと、準備を進めています。小中高生のご参加をお待ちしています。

詳細につきましては、財団 HP (<https://www.ofsf.or.jp/activity/gathering.html>) をご確認ください。

理事 飯田秀利

* 予定が変更になった場合はホームページでお知らせします

編集後記

昨年末、ある新聞記事が目につきました。ドイツの大学の研究チームが学術、芸術、スポーツなどの分野で活躍する人を調べたところ、科学分野でノーベル賞を受賞した人と受賞できなかった候補者を比較すると、若い頃の評価は受賞者の方が劣っていて教育研究の奨学金を得られないことが多く、教授に昇進する年齢も遅かった。科学以外の複数の分野でも世界トップクラスで活躍する人の 9 割が若い頃には目立った存在ではなかった、という。英才教育ももちろん必要でしょうが、それだけでは独創性と先見性に富み、時代を拓くトップクラス人材の育成には必ずしもつながらない、というデータではないでしょうか。科学分野の日本人ノーベル賞受賞者の多くを見渡して納得してしまうのは私だけでしょうか。

理事 大谷清

財団事務局からご寄付のお願い

＼ある日の大隅財団事務局の会話を、ちょっとのぞき見 📱 /

A: ねえ、昨年 SNS きっかけで個人寄付がぐっと増えたの、改めてすごかったよね…！

B: うん…寄付も嬉しかったけど、コメントの言葉が本当に胸に残った。励まされればなし。

C: 「すぐ役に立たなくても未来を支える」って、まさに大隅先生が守りたい基礎研究そのものだよな。

A: 「砂漠に撒かれる種子」って表現もすごく素敵だった…未来の緑になるって。

B: あと「花（成果）は土壌（基礎研究）からしか咲かない」って。読んで感動した…。

C: 研究環境のこと心配してくれてる声も多かったよね。「基礎研究が軽視されているのが不安」って。

A: 博士号を取ったけど研究を続けられなかった方の「少しでも寄与できれば」って言葉も重かった。

B: 科学に救われた経験から寄付してくれた方もいて…“科学への恩返し”って、すごく大きいなあ。

C: 寄付って金額じゃなくて、**未来へのメッセージ**なんだね。
今年も、みなさんの気持ちを研究者にしっかり届けよう。

基礎科学の可能性を信じ、これからも持続可能な科学の発展に取り組んでいきます！

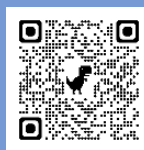
寄付のお申し込みはこちら

◆個人寄付・継続寄付は、下記財団のホームページからお申し込みいただけます。遺贈によるご寄付についてのご相談も承っております。

（財団HPはこちら↓）

<https://www.ofsf.or.jp/donation/>

また、右記の QR コードを読み取っていただくことで、寄付ページへアクセスできます。



当財団へのご寄付は、寄付金控除の対象となります。

◆より多くの方にこの活動を知っていただき、支援の輪を広げていきたいと願っています。ご協力いただける方には、財団のチラシ（寄付金払込票付）やニュースレターをお送りいたしますので、お気軽に財団事務局までご連絡ください。

◆ご不明な点のある方、今後のニュースレター送付不要の方は、事務局までお気軽にご連絡ください。

事務局 お問い合わせ先

☎ 045-459-6975 ✉ info@ofsf.or.jp

HP <https://www.ofsf.or.jp/>

皆さまへのお礼とお願い

今回ご寄付をお寄せくださった皆さま、そしてこれまで継続してご支援くださっている皆さまに、心より感謝申し上げます。多くのご寄付と温かいメッセージをいただき、誠にありがとうございました。

活動を取り巻く環境の変化により、運営面では引き続き工夫が必要な状況ですが、皆さまのご支援が活動を支える大きな力となっています。

今後も、応援していただければ幸いです。

ご寄付は活動の継続・発展、次の 10 年につながる力になります。



〒226-8501

神奈川県横浜市緑区長津田町 4259 S2-16

公益財団法人 大隅基礎科学創成財団

TEL: 045-459-6975 FAX: 045-459-6976

E-mail: info@ofsf.or.jp

URL: www.ofsf.or.jp

発行責任者 大隅良典

